

辻 誠一郎¹: 2004年度国立歴史民俗博物館企画展示『海をわたった華花』

Sei-ichiro Tsuji: The project exhibition of the National Museum of Japanese History in the fiscal 2004, "Plants and Flowers that Crossed the Sea"

1. はじめに

国立歴史民俗博物館は2004年度の企画展示として、『海をわたった華花』を2004年7月13日～9月12日の約2ヵ月間、同博物館において開催する。これは、後述するように、縄文時代から現在までの日本列島への植物の渡来とその日本文化に与えた影響をテーマにしており、人と植物のかかわり史をテーマとした展示は、公的な博物館・資料館では初めてである。植生史研究に係る展示としては、大阪市立自然史博物館が開催した三木茂コレクションの標本整理完成を記念した展示(1993年)や、陸上植物の進化の最新の研究成果を集めた展示(2003年)、東京大学総合研究博物館が開催したシーボルト採集標本の里帰りを記念したシーボルト展示(2003年)等を上げることができるが、開催頻度はひじょうに低い。今回の展示は、人と植物のかかわり史に関するこれまでの研究成果を公開することを目的としているが、これからのこの方面の研究と企画展示の開催を促進する意味で、展示の内容紹介、および明らかになってきた研究の到達点や問題点も若干示しておきたい。展示場に足を運んでいただき、植生史研究全般にかかわる研究レベルと問題点を確かめていただければ幸いである。

2. 展示の目的

展示の目的は、縄文時代から現在までの日本歴史において、海をわたってきた植物たちが生活文化史に大きな影響を与え、あるものは生活文化を動かす原動力にもなってきたことを具体的に確かめることである。弥生時代に本格的に稲作農耕が日本に伝えられ、イネとムギ類といった穀類の追跡が考古学をはじめとする歴史系の分野では主要な課題であったが、それだけで生活文化史を語ろうとしてきた偏った歴史観への批判と、生活文化の多様性を実際に資料で示すことも大きな目的である。日本の花と言えばキク(菊)であるが、そのキクは不老長生を伝える菊水伝説とともに妙薬として中国から日本に伝えられたことを確かめる機会ほとんど無かったといつてよい。江戸時代後期に隆盛するアサガオ文化にしてもである。

この展示の大きな特徴は、縄文時代から現在までの過去1万年間を対象にしていること、植物を主な資料として、残されたものと生きているものを展示していることである。なぜ大きな特徴かと言えば、歴史学の展示では古代、中世、近世といったように小刻みな時代を対象とすることはあっても、千年を越えるような通史を対象にすることなどあり

得ないからである。また、植物を歴史学が対象にすることは、絵画資料や農耕を対象にすること以外、とても現状では考えにくいからである。

展示方法で大きな特徴がある。展示室では大きな仕切りがなく、各室の中央に立てば、展示の全体を手取るように展望できるようになっている。よい悪いは別にして、最近流行している迷路よろしく多数の仕切りで複雑な進行を促す展示とは大きく異なる。迷路好きな子供たちにとっては物足りないかも知れないが、全体を捉えた上で部分を見る、部分を見た上で全体を見る、といった展示も必要ではないかと考えてのことなのである。

展示資料は、すなわち立証してくれる資料であるが、今回の展示では、遺跡の発掘調査で得られる考古学的な遺物、美術史を含めた歴史学で対象となる文献資料や美術工芸品、近・現代まで保存されていた民俗資料、種子として保存されていた植物学的資料や栽培育種学・遺伝学など現代科学による解析・復元資料と、実に多岐に及んでいる。今回の展示が、人文社会科学的な手法と自然科学的な手法を相互に導入して研究レベルを向上させようという共同研究を反映させたものであるからである。

テーマは「海をわたった^{はなばな}華花」としているが、海をわたったとは、過去、日本歴史において海外との交流によって行き来したことを意味している。今回の展示は、日本歴史を中心に据えているので、主として海を越えて日本列島にもたらされたものを対象にしているが、今後は東アジア史や世界史の視野で捉えられなければならないことは当然なので、よく分かっているシーボルトらによるヨーロッパへの流出をも取り上げた。華花は、国語辞書にはない造語である。かつて中国でも植物の花と言えば華の字を使用していたように、日本に伝えられた植物の多くが中国からであること、現在は日本でも中国でも広く使用されている花と中国で古くに使用された華という字を重ねて、花を咲かせる植物たちを表現したものである。

「ヒョウタンからアサガオまで」という副題が付けられている。ヒョウタンは、約1万年前の縄文時代早期にすでに日本列島に出現しており、見つかっているのが果実であるので、「ヒョウタンから」には、対象が古くは縄文時代からであること、花だけではない果実も含むという意味が込められている。「アサガオまで」は、アサガオが日本文化史に象徴的に現れるのは江戸時代後期の変化アサガオとしてであるから、新しい近・現代まで続くという意味が込められている。

展示の表題は、しばしば研究・展示の目的を明確に示さない場合がある。それは、展示という催しが研究者の一方的な意志だけで成り立つわけでないからである。植物や植物化石の展示は、自然史系の博物館で開催されるのが一般的であったが、今回のように人文社会・歴史系の博物館では、他の企画展示ともある程度はマッチした表題を考えざるをえないという事情もある。研究成果を展示という形にしていこうという動きは今後活発になると思われるので、この点も共有すべき問題点と言わなければならない。

3. 展示の構成

企画展示の構成は、大きく2つの会場から成り立っている。一つは国立歴史民俗博物館本館の企画展示室とその周辺である。もう一つは、本館から歩いて十分程度の佐倉城址公園の一角にある歴博くらしの植物苑である。本館では、特別な事情がない限り、生きた植物を展示するこきはできないので、開花したアサガオや結実したメロン・ヒョウタンは後者のくらしの植物苑に譲らざるをえない。

2本館の展示はエントランスから始まる。真っ赤な船にさまざまな海をわたった華花を詰めた樽などが積載されている。海をわたる基本キーワードは、船と人と華花である。そのうち人がここで抜け落ちているのは、人の顔や衣装など時代考証に困難な点が多いためである。歴博ならではの重い課題である。左手奥に、生け花のコーナーが設置してある。これは千葉県茶華道協会の協力によってできたもので、毎週、現代の流派ごとに展示替えが行われる。週によって流派が異なるのである。日本の生け花は世界の花文化の中でも異色を放っており、最近では急に世界の注目を浴びるようになってきた。生け花は花を立てるの意の立て花を基礎にしており、仏教の死者に香華かうげをたむけるための花を立てることが専門化したと考えられる。温帯にある日本では、香りより、色や形への美的意識が洗練されていった軌跡を確かめることができるだろうか。

4. 第1室：日本通史

企画展示室の展示が、今回の企画展示の主会場である。第1室から第3室まで、それぞれ異なった構成と内容をもっている。

第1室は、縄文時代から現在までの過去1万年間の日本通史と、謎と幻の華花の二つのテーマから構成されている。まず、華花が海をわたるにあたって、日本列島をとりまく海の状況（海流など）が描かれ、縄文時代以降に海をわたった海上のコースと船の移り変わりが紹介される。やがて、世界5大暖流の一つともされる黒潮の過去1万年間の勢力が海上交流上大きな意味をもっていたことへと導かれる。通史は後期旧石器時代に始まり、近・現代で終わる。

第1室で注意を払っていただきたいのは、後期旧石器時代から現代までの日本列島の植生変化が背後に描き出されており、縄文時代から弥生時代へ、古代から中世へ、中世から近世へ、農耕による開発や都市開発が日本の生態系を改変してきた歴史と抱き合わせに華花が海をわたっていることである。海をわたってきた華花は、日本の生活文化に深くかかわってきただけでなく、ともにわたってきた文化は日本の生態系の変化にも深くかかわってきたとも言えるのである。それがすべてではないにしても、そうした視点に立って日本の生活文化史を捉えなおしてみる必要はあるだろう。

後期旧石器時代、縄文時代、弥生時代から古代へ、中世から近世へ、近代から現代へ、という時代設定の順に右から左へと展示が展開する。この時代設定には意味がある。縄文時代は海をわたった華花がまだ希薄な時代、すなわち自生の植物が生活文化に深くかかわり続けた時代、弥生時代から古代は海をわたった華花が大波で押し寄せる第1期、中世から近世はその第2期、近代から現代はその第3期としているのである。

弥生時代から古代へは、稲作農耕はもとより、その後の日本の農業一次生産を支える主要な植物が伝えられるとともに、精神世界と深くかかわることになる花文化の主役たち、たとえばウメ、ボタン、キク、アサガオ、キキョウ、スイセン、また果実や木材が主役のモモなどが伝えられた。鉄器の導入と普及は生態系の改変に大きな役割を演じた。

中世から近世へは、商業貿易の隆盛が大量の陶磁器や織物、あるいは香辛料の流通をもたらした。ワタやナノハナ、チャノキやソバ、さらにすでに古代に伝わったものでも、ベニバナや多くの野菜・果物類のように第二波として新たな品種群が伝えられ、流行していった。中世以降の都市の時代では、都市生態系の特徴でもある未消化ゴミを累積していった。このゴミが海をわたった華花の解説に大きな役割を演じていることは皮肉である。

近代から現代へは、本格的な西歐化によってもたらされた。近世においてすでにあつた野菜や果物も、ここでは大きなものへ、おいしいものへ、品種が大きく入れ代わるか品種改良がなされた。食文化の西歐化、すなわち西歐料理の普及も大きな担い手になった。コロケやカレーライスの急速な普及は、すなわちジャガイモの普及を意味した。シーボルトたちによって一度は西歐にわたっていったユリの仲間やキクの仲間が品種改良ののちに日本に里帰りし、贈り物としての花束が流行に花を添えた。

古代では、平城京—長屋王邸宅の華花が取り上げられる。古代から近世までの遺跡の発掘調査によって確かめられた植物遺体は膨大な量にのぼるが、その中で質・量ともに際立っているのが長屋王邸宅とその周辺域から見つかってい

る植物遺体群である。刊行されている報告書からその実態を把握することはとうてい無理である。植物遺体を専門に研究している者であっても、それらをどのように整理し、記述していったのか戸惑うほどであるからである。これを眼の前にすると、植生史研究の未熟さを痛感させられる。これはモモ、これはウメ、これはメロンでは片づかないのである。当然のことではある。この展示が初公開である。

近世では、京都在住の画家であった伊藤若冲が1780年頃に描いた『野菜涅槃図』をもとに再現した当時の野菜模型の展示がある。中央に裏返した籠の上に横たわる二股のダイコンが釈迦を示しており、その周囲にさまざまな野菜や果物が取り巻いているのである。そのほとんどは、海をわたってきた渡来の野菜や果物である。

通史の最後に、国際交流の証人たちというコーナーがある。ここでは、メタセコイアとシーボルト・チルドレンの二つが取り上げられる。由来は異なるが、いずれも記念樹として自生地ではなく異郷の地に植栽されたものである。メタセコイアは校庭や公園にごく普通な木であるが、三木茂が化石に対して命名した木が数年後に生きていたことが確かめられたものである。シーボルト・チルドレンは、シーボルトが江戸時代にオランダに持ち帰った木々の子孫が記念樹として日本に里帰りしたものである。このような記念樹は過去においては数知れずあったに違いない。由来がいまだに分からない渡来植物の多くは、実はこうした記念樹がもとになっている可能性が高い。

5. 第1室：謎と幻の華花

渡来であるとまでは言えそうだが、詳細は闇の中という植物は、実は日本にはたくさんある。渡来であるか、自生なのかがはっきりしないという植物も多い。南方から突き上げてくる強い勢力をもった黒潮の影響も多分にあるのかも知れない。ここでは、ベニバナ、センノウ、イチヨウ、ウルシ、チャンチンモドキの5つを取り上げた。

まず、ベニバナ。奈良県斑鳩町の藤ノ木古墳の石棺の中にベニバナが副葬されていたことが、1989年9月に大々的に報道された。紅色の正体がベニバナの花粉であったからである。ベニバナの果実や花粉は、その後の遺跡発掘調査に伴う自然科学調査でもしばしば検出されているが、取り立てて話題に上ることはなくなった。が、中世末から近世では、山形県の最上盆地で商業ペースで栽培されはじめ、最上紅花として一世を風靡した。

センノウは、1995年の夏、出雲のセンノウとしてテレビで報道されたのが生き残り発見の契機となり、また、増殖・復活の契機ともなった。室町時代から江戸時代にかけて、京都では生け花や庭園の鑑賞に普及したが、近年では、植物学者も確認していなかった幻の植物であった。富山県中

央植物園の神戸敏成氏らチームが組織培養によって、多数の苗を作ることに成功した。展示ではその経緯を振り返る。

イチヨウは仏教とともに日本に伝来した、と覚えている人は多い。神社仏閣に巨木が残るので、そう伝えられているのかも知れないが、実態は不明である。文献による調査では、中世になってからのこととされる。どうして神社仏閣なのか、どうして中世にまで下るのか。謎は尽きない。

ウルシは、照葉樹林文化の要素として伝えられ、日本でも独自の発展を遂げたとされてきた。近年、漆塗り容器が縄文時代の遺跡からはふつうに発見されるようになり、また、その技術は弥生時代以降のものとは比較にならないほど高度なものだったことが明らかになってきた。そして、決定的な事実、ウルシと同定できる木材が縄文の遺跡からたくさん発見されるようになってきたことである。

チャンチンモドキは、九州南端部や天草諸島に自生していると言われる。九州南端や孤島に自生しているとされる植物は実に多い。最近、長崎県の縄文時代から弥生時代にかけての遺跡から果実の核がしばしば検出されるようになり、少しは注意されるようになってきた。佐賀県の吉野ヶ里遺跡の古代の井戸では、その井戸枠に木材が使用されていた。本当に自生なのか、人がかかわりすぎているので気になる木ではある。

6. 第2室：華花たちの履歴書

海をわたってきた華花の中から、衣食住、そして精神世界にかかわってきた象徴的な植物を6つのコーナーに分けて取り上げてみた。ヒョウタン、メロン、サトイモ、モモとウメ、アサガオ、キクである。現代流行のガーデニングから期待されるのは、せいぜいキクやアサガオくらいかも知れないが、これらはいずれも日本歴史をずっと背負ってきた植物たちなのである。

ヒョウタンは、日本列島において人とのかかわりがはっきりしている植物の中ではもっとも古い歴史をもっている。福井県三方町の鳥浜貝塚の約1万年前の包含層から種子や果実が検出されている。隣の滋賀県琵琶湖底の粟津湖底遺跡からも、同時期の種子や果実が検出されている。ヒョウタンは日本歴史では1万年という長さを誇っている。弥生時代から古代では、精神世界と深くかかわった植物として注目される。祭祀遺構とみられる場所から特殊な形をしたヒョウタン果実が複数まとまって出土することが多いからである。今回、奈良大仏殿の銅の鑄造にかかわった山口県美東町の長登銅山跡遺跡の遺構のうち、7個の特異な形をしたヒョウタンが並んで出てきた遺構を模型で復元した。初めての試みである。現代ではおなじみの、くびれたヒョウタンは中世以降でしか見られない。このことも意外な事実である。

メロンは、狭義のウリ(瓜)のことである。ヒョウタンと同様に、どんなに形や色が違っていても、変種間ではいくらかでも交雑し、子孫を残すことができるという特異な分類群である。弥生時代に最初ザッソウメロンが登場し、続いてマクワ・シロウリ型メロンが加わり、古代に一時、モルディカメロンという特殊な大型のメロンが登場するものの、中世から近世ではマクワ・シロウリ型メロンの流行を迎えるという日本歴史をもっている。初期のザッソウメロンは現在、瀬戸内海や九州西方の孤島にしか残存せず、モルディカメロンも福江島や東京都の八丈島にしか残存しないというのも興味深い。

サトイモは、日本の民俗儀礼にさまざまな形で登場する植物で、人とのかかわりは稲作が伝えられるより前からと考えられてきているのに、遺体そのものが遺跡から検出されないために、その歴史はいまだに謎に包まれている。とはいえ、その起源地は、現在も根菜文化が続く東南アジアであることは間違いなく、二倍体と三倍体への分化や、さまざまな品種群への分化によって東南アジアから中国、日本へと分布が広まっていったと考えることができる。日本で食用に栽培されるサトイモは三倍体の品種群である。北上ルートをたどり、三倍体形成の歴史的なプロセスが解明できるだろうか。

モモとウメは、どちらも中国から伝えられた植物だが、日本への渡来時期やルート、それに伝えた人々は異なるようである。モモは弥生時代には各地の遺跡から見られるようになり、当時としてもポピュラーな植物の一つに上げられるかも知れない。食料としてだけでなく、精神世界とのかかわりが深かったと見られている。伝説に呪力・霊力を説いたものが多いからである。これに対してウメは、万葉集にもよく詠まれているように、当時の花文化に大きくかかわった植物といえる。古代から近世へ、美術工芸の世界に登場するものウメで、食料として大衆化するのとは近世以降のことである。

アサガオは、古代に葎草として中国から伝えられ、長く青色一色のアサガオが近世まで育成されたが、江戸時代に入って白花の突然変異が現れ、さらに花形や色の変化に富んだ突然変異が生み出されるようになり、江戸時代後期では2度におよぶアサガオのブームが起こった。この突然変異を起こした奇花・奇葉のアサガオは変化朝顔と呼ばれている。近年では、これら突然変異体の遺伝子や、その原因となっているトランスポゾンの構造・機能が明らかになりつつあり、遺伝子レベルで変化朝顔の形成のプロセスが解明されるようになってきた。この展示では、初めて遺伝子

レベルでの解読の成果を公開する。

キクは、もっとも日本的な花として定着しており、日本の花と言えば、キクかサクラかと言われるほどであろう。それほどのキクが、万葉集では一首たりとも詠まれていないことから、その後日本に伝えられた植物であることは明らかである。古代の宮廷行事では菊花の宴が催され、重陽の節句でも観菊の宴や菊酒を飲む風習、きせ綿の風習が宮廷儀礼として流行していたことは、花としての菊だけでなく、精神世界とのかかわりがともに伝えられた証拠であろう。近世になってからは、上流のものだった菊文化はしだいに大衆化し、江戸菊としてたくさんの品種群が作りだされ、また、菊人形などのように見世物として流行していった。菊の文化は、重要文化財を含むたくさんの美術工芸品や、菊細工などから知ることができる。

7. 第3室：日本の植物，西欧にわたる

『日本植物誌』をツッカーリー二とともに著したシーボルトは、日本の植物を科学的に研究した科学者であったばかりか、日本の植物をヨーロッパに広く紹介した第1人者でもあった。この展示では、シーボルトらが採集した植物標本のうち東京大学総合研究博物館に里帰りしたアジサイなどの標本を展示する。また、植物を生きたままの状態で運んだ「ウォードの箱」が船中に置かれた状態で再現してある。

8. 第3室：華花を読み解く

以上のような展示は、これまでの長年に及ぶ調査と研究に裏付けられたものである。展示では、野外調査の方法、DNA解析、民俗調査を例に、華花の履歴の読み解き方を最後に紹介した。このコーナーでは是非とも見てほしいのは、東京都千代田区の現在の総理大臣官邸の地下の地層のはぎとりである。長さ(深さ)5 m、幅3 mは圧巻で、縄文海進の最後の堆積物から、海退時代の泥炭層、中世の水田時代の堆積物、そして江戸時代の外堀の一角であった溜池時代の池沼堆積物が下位から順に見られる。そして最上部に、溜池に廃棄され累積した大量のゴミの層が載っている。これほどの規模のはぎとりは、前にも後にも聞いたことがない。植生史研究にとってこのはぎとりが意味することを、実見して考えていただきたい。

(¹ 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 (東京大学文学部考古学研究室気付) 東京大学大学院新領域創成科学研究科環境学系 Institute of Environmental Studies, Graduate School of Frontier Sciences (c/o Department of Archaeology, Faculty of Letters), the University of Tokyo, 7-3-1, Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113-0033, Japan)